

近代期における開拓と農村地域空間形成の研究

正会員 柳田良造君

わが国の近代化は殖産振興や富国強兵に表される都市づくり、産業施設の建設が中心であったが、同時に農村づくりも盛んに行われ、近代期における農地の拡大は日本の耕地面積の四分の一近くに達する100万haを越えていた。これらの多くは新たな原野開墾によるもので北海道が主になっていたが、原野事業そのものを興した地域は全国に広がっている。本論文は明治から大正期に至る日本の近代期における原野開墾や未開地の開拓を対象としたもので、特に北海道開拓期における市街区画である屯田兵村と殖民区画の計画原理について、膨大な現地史料や地図等を精査し、都市計画立案者の視点で多層にわたるその計画原理を詳細に明らかにしたものである。

屯田兵を入植させるための屯田兵村の計画手法として、まず選地が重視されて選地方法そのものが優れたデザインといえとし、村の形成計画は未開の原野における多種多様な階層の出身者からなる生活共同体という側面を考慮したすぐれたコミュニティ計画であったと指摘している。また屯田兵村はそれぞれの場所の特性や時代制約のなかで個別につくられていったものであり、それぞれが固有の様相を示すものであるが、集落空間を構成する要素の設定およびそれらの配置方法を見るとある種の理想型モデルに帰着するとし、集落空間の形成方法は入植定着のための条件を先駆的かつ計画的に重視して作り上げられたデザイン手法としてとらえられるとしている。さらにその計画意図は、一世紀を越えて地域空間形成の過程をリードしてきたとする視点はこれまでにないすぐれたものである。

また殖民区画制度は、大量の移住民に対応するため、あらかじめ道路や市街地の構成を計画し、農耕予定地を計画的に区画処分するための制度である。これは大量の土地需要をさばくためには有効であったが、入居者の共同性を醸成する基盤としての集落計画だけは欠落していた。この点に関しては従来、北海道庁の方針により農地の中に居住地を分散させていたものとされていたが、計画者の間では集落計画の必要性が認識されていたものの諸般の事情がその実施を許さなかったものであるという本論文の指摘は、これまでの通説を覆す新たな発見である。

日本近代における国土・地域・都市・農村の空間計画史という領域を考えると、従来の殆どの研究は、すでに開発がなされていた地域において近代の計画技術が如何に展開されたかという視点を暗黙の前提としていたといえる。それに対して、本論文は未開の地において計画技術が如何に展開したかという新たな視点を導入したものであるとして高く評価されるべきである。

本論文は、網羅的かつ詳細な文献の発掘と整理を通して、北海道の歴史的経緯と地域空間形成の関係を分析し、屯田兵村と殖民区画という市街区画の開拓手法について、構想段階と実施段階について計画およびデザイン面での評価をおこない、背景に込められた理論を明らかにしたものである。ここにおいて本論文は、都市と農村を同時に包含する地域計画史という新たな分野を開拓したといえよう。今後は市街区画の更なる研究により、農村と都市を含む地域空間の形成・計画論へと大きく展開することが期待され、関連する領域の研究前線を大きく前進させた先駆的研究であると評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。